原著論文

高校における運動部活動経験と精神的回復力の関係[†]

上野耕平* 若原優二**

Relationship between Experiences in a High School
Athletic Club and Resilience[†]

Kohei UENO* and Yuji WAKABARA**

Abstract

The purpose of this study was to clarify the relationship between experiences in a high school athletic club and resilience. One hundred and ten high school athletic club students (58 first year students : 36 males, 22 females, 52 second year students : 30 males, 22 females) completed an athletic situational skills scale, a life skills scale (Ueno and Nakagomi, 1998) and an adolescent resilience scale (Oshio et al., 2002). Both the athletic situational skills scale and the life skills scale are used to evaluate the psychological skills of students in both their athletic club and school life. The adolescent resilience scale has three subscales, including novelty seeking, emotional regulation, and positive future orientation. Structural equation modeling method was used for the analysis in this study. From the results, it was found that psychological skills in an athletic club relate to resilience through psychological skills in school life. The relationship between experiences in an athletic club and resilience of the second year students was stronger than that of the first year students. This suggests that experiences in a high school athletic club strengthen the resilience of the students if the coaches can work to integrate psychological skills that have been acquired through participation in athletic clubs into school life.

Key words : Life Skills, Social Skills, Resilience, Athletic Club, Extracurricular Activities

1. 緒 言

勝利至上主義¹⁾, 体罰²⁾, 弱者切り捨て³⁾などの問題を抱えながらも, 運動部活動は生徒の人間的成長を導く活動であるとして社会から積極的な期待を受けてきた⁴⁾. それは, 運動部活動において困難な問題を克服した経験, 仲間と

助け合った経験が, 学校生活だけでなく将来困難な状況に陥った際にも役立つと期待されているからである.

体育・スポーツ心理学領域では, 運動部活動への参加を通じて生徒が身につける能力としてライフスキル (life skills) に注目した研究が行われてきた⁵⁾⁶⁾. ライフスキルは「日常生活で

[†]原稿受付 2013年3月4日 原稿受諾 2013年5月27日

*鳥取大学教育センター 〒680-0945 鳥取県鳥取市湖山町南4-101

**鳥取県立米子養護学校 〒689-3543 鳥取県米子市蚊屋343

*Education Center, Tottori University, 4-101, Koyama-minami, Tottori, Tottori, Japan (680-0945)

**Tottori Prefectural Yonago School for Special Needs Education, 343, Kaya, Yonago, Tottori, Japan (689-3543)

生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」と定義され、具体的には意志決定やコミュニケーションスキルなどの心理的スキルを指している⁷⁾。Danish et al.はスポーツ場面においてよく利用される心理的スキルのなかには、例えば目標設定や情緒コントロールなどのようにライフスキルとして日常生活場面においても利用できる心理的スキルが含まれているとしている。そしてスポーツ場面において獲得したスキルを、ライフスキルとして状況が異なる日常生活場面においても利用できるようにする（般化させる）ことにより、現在の生活及び将来遭遇する困難な状況にもうまく対処できるとしている⁸⁾。上野は運動部活動への参加を通じて獲得した目標設定スキルを学校生活場面に般化させることを目的としたプログラムを実施した結果、学校生活場面における目標設定スキルの獲得が時間的展望の肯定的変容と関係していたことを明らかにしている⁹⁾。時間的展望には将来の行動を動機づける機能があることからすれば¹⁰⁾、運動部活動場面における目標設定スキルであってもライフスキルとして般化させることにより、生徒の将来の行動に影響を及ぼす可能性があると推測される。しかし、運動部員が獲得しているライフスキルが将来困難な状況に陥った際に果たす役割について実証的に検討した研究は見当たらず、依然として不明確なままである。

解決の難しい困難な問題に遭遇したとしても、そこでの経験を糧として乗り越えていく力や資質を表す概念としてレジリエンス(resilience)がある。Masten et al.¹¹⁾はレジリエンスを「困難な状況にも関わらず適応に成功した過程、能力あるいは結果」と定義している。そして特に適応を果たす上で求められる人格特性または能力に注目する場合には、レジリエンシー（本研究における精神的回復力）と呼ばれる¹²⁾。

石毛・無藤¹²⁾はレジリエンシーに注目し、中学生を対象として精神的健康との関係について検討している。その結果、受験期の学業に関す

るストレスの克服には、身近な人々からの支援と共に生徒のレジリエンシーが関係することを示している。また小塩¹³⁾は「困難な状況において苦痛を感じながらも、その後の適応的な回復を導く心理的な特性及び能力」を精神的回復力と定義し、大学生を対象とした調査を通じて、困難なライフイベント（人生における一大事）を経験したにも関わらず自尊心が高い学生は低い学生よりも、精神的回復力が高かったことを明らかにしている。このように、精神的回復力が高い生徒であれば、困難な状況からも立ち直りやすいと考えられる。従って運動部員が獲得しているライフスキルと精神的回復力との関係を分析することにより、将来困難な状況に陥った際に運動部員のライフスキルが果たす役割について検討することができる。上述したように、社会から運動部活動に寄せられる期待は小さくない。運動部活動場面において心理的スキルを獲得しておくことが生徒の精神的回復力に肯定的な影響を及ぼすことが示されるならば、運動部活動経験が生徒の人生において果たす役割の一端を明らかにできると考えられる。

そこで本研究では、運動部員が運動部活動及び日常生活場面で利用している心理的スキルに注目し、運動部活動経験と精神的回復力の関係について実証的検討を加える。

上野・中込¹⁴⁾は、運動部員を対象とした調査を通じて運動部活動場面における心理的スキル（以下、競技状況スキルとする）と日常生活場面における心理的スキル（以下、ライフスキルとする）を測定する尺度を作成している。心理的スキルを測定する尺度については、闘争心や判断力などスポーツ場面における心理的スキルを扱った尺度¹⁵⁾や、情報要約力や感受性など日常生活場面における心理的スキルを扱った尺度¹⁶⁾も認められる。しかし、どちらか一方の場面において重視される心理的スキルに注目した尺度では、運動部活動経験が果たす役割を確認する上で少し思索が必要である。上野・中込が作成した尺度は両方の場面において共通して用いられるスキルに注目して作成されている

図1 本研究の仮説モデル

ことから、本研究では上野・中込が作成した尺度を用いた。他方精神的回復力に関しては、小塩ら¹³⁾が作成した「新奇性追求」,「感情調整」,「肯定的な未来志向」を下位尺度とする精神的回復力尺度を用いた。

なお本研究では、運動部活動経験と精神的回復力の関係を検討する上で、図1に示す仮説モデルを構築し、構造方程式モデリングによりデータへの適合度を分析する。仮説モデルでは、運動部員の精神的回復力の高さには運動部活動場面における競技状況スキルの獲得程度と、そのスキルを日常生活場面へと般化させたライフスキルの獲得程度が関係すると想定した。新奇性追求や肯定的な未来志向といった心理的な特性には、それを可能とするコミュニケーションスキルや目標設定スキルなどの心理的スキルの獲得程度が関係すると考えられる。従って、運動部活動への参加を通じてライフスキルを獲得している運動部員であれば精神的回復力も高くなると考えられた。また上野・中込¹⁴⁾は、運動部員のライフスキル獲得程度には競技状況スキルの獲得程度が関係することを明らかにしている。従って、競技状況スキルの獲得程度も直接もしくは間接的に精神的回復力と関係すると考

えられ、競技状況スキルを獲得している運動部員であれば精神的回復力も高くなると考えられた。

さらに本研究では調査対象者を学年ごとに分析することにより、運動部活動経験と精神的回復力の関係について心理的スキルの学習経験の観点から考察を加える。心理的スキルトレーニングという言葉に象徴されるように、心理的スキルは学習によって獲得可能であることを特徴の一つとしている¹⁷⁾¹⁸⁾。学年が異なれば運動部員として求められる、つまり学習する心理的スキルにも差が生じるであろう。また、学年差には単純に当該スキルに関する学習時間の差も表れると推測される。以上のように、学年差を分析の視点として加えることにより、運動部員の精神的回復力と関係する心理的スキルの獲得についてより詳細に検討できると考えられた。

2. 方法

2.1 調査対象者

私立高校1校の運動部に所属している、一年生58名(男子36名・女子22名)及び二年生52名(男子30名・女子22名)、合計110名(年齢: $M = 16.47$, $SD = .50$)を調査対象者とした(注1)。

なお所属運動部別の調査対象者数を表1に示した。調査に際しては、調査目的及び得られた情報の取り扱いについて調査用紙に記載して説明し、調査対象者から調査への協力に対する同意を得た上で実施した。

2. 2 調査の手続き及び内容

調査は対象者の基本属性（学年、性別、年齢、所属する運動部）を問う質問のほかに、下記に示す3つの尺度から構成されていた。

2. 2. 1 競技状況スキル尺度

上野・中込¹⁴⁾が作成した競技状況スキル尺度は、日常生活場面における心理的スキルを測定するライフスキル尺度と共に作成され、それぞれ運動部活動もしくは日常生活場面と状況は異なるものの、対人スキル及び個人的スキルという同じ下位尺度から構成されている。競技状況スキル尺度の対人スキルは「チームメイトと練習方法について情報を交換している」、「チームメイトからのプレーに対するアドバイスを受け入れている」など、スポーツ場面における他者との関わりに関する質問項目から構成され、個人的スキルは「だらだらやらず、時間を決めて練習している」、「試合ごとに何らかの目標を持って出場している」など、スポーツ場面における目標達成に向けた取り組みに関する質問項目から構成されている。説明文には普段の部活動場面における自分の行動を振り返った上で回答するよう記載した。調査への回答は、1（まったくあてはまらない）から7（大変あてはまる）までの7件法により実施した。分析には各質問項目に対する回答を下位尺度ごとに合計した得点を用いた。各下位尺度（対人スキル:10項目、個人的スキル10項目）における得点範囲は10点から70点である。

2. 2. 2 ライフスキル尺度

先述したとおり、上野・中込¹⁴⁾は高校生のライフスキルを測定する目的で対人スキル及び個人的スキルを下位尺度とするライフスキル尺度を作成している。ライフスキル尺度の対人スキル（10項目）は「一度決まったクラスの方針に

表1 所属運動部別の調査対象者数

所属運動部	1年		2年		計
	男	女	男	女	
バレーボール	1	7	5	3	16
ソフトボール	2	4	6	10	22
剣道	7	6	3	5	21
バスケットボール	3	0	0	0	3
ソフトテニス	6	5	2	4	17
陸上	3	0	10	0	13
野球	14	0	4	0	18
計	36	22	30	22	110

は従っている」、「同じクラスの色々な友達と話をしている」など、日常生活場面における他者との関わりに関する質問から構成され、個人的スキル（10項目）は「長期的な目標と短期的な目標を持っている」、「できるだけ具体的な目標（例えば点数、順位、正答数等）を持っている」など、日常生活場面における目標達成に向けた取り組みに関する質問項目から構成されている。説明文には日常生活場面における自分の行動を振り返った上で回答するよう記載した。調査への回答方法及び分析方法については、競技状況スキル尺度と同様に実施した。

2. 2. 3 精神的回復力尺度

小塩ら¹³⁾は、不可避で困難な事態からの回復を導く心理的特性を測定する目的で精神的回復力尺度を作成している。彼らは精神的回復力を構成する因子として、将来に対する夢や目標の存在、人生の目的、忍耐力ほか多くの因子が挙げられているなかで、多くの研究に共通していた、常に前向きな展望を持ち続ける未来志向性、適切な感情調整、興味や関心の多様性、苦しい状況に耐える忍耐力に絞って尺度化を試みた。その結果、新奇性追求（7項目）、感情調整（9項目）、肯定的な未来志向（5項目）の3つの下位尺度を見出している。各下位尺度はそれぞれ「色々なことにチャレンジするのが好きだ（新奇性追求）」、「いつも冷静でいられるようこころがけている（感情調整）」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う（肯定的な未来志向）」などの質問項目から構成されている。

表2 各変数の相関係数と平均値及び標準偏差

潜在変数	観測変数	1	2	3	4	5	6	平均値	標準偏差
競技状況スキル	1. 対人スキル	—						55.52	7.67
	2. 個人的スキル	.68***	—					52.21	8.39
ライフスキル	3. 対人スキル	.48***	.31***	—				51.15	8.41
	4. 個人的スキル	.47***	.63***	.42***	—			47.39	8.12
精神的回復力	5. 新奇性追求	.42***	.46***	.39***	.40***	—		3.62	.64
	6. 感情調整	.29**	.36***	.33***	.30***	.51***	—	3.08	.64
	7. 肯定的な未来志向	.43***	.42***	.39***	.47***	.60***	.44***	3.80	.77

** $p < .01$, *** $p < .001$

説明文には1（いいえ）から5（はい）までの5つの選択肢を示した上で、各質問について自分の気持ちに一番近いと思う番号を一つだけ選ぶよう記載した。分析には下位尺度ごとに各質問項目に対する回答の合計得点を質問項目数で割った平均点を用いた。

調査は各運動部の顧問教諭に依頼し、学年末の春期休業期間にそれぞれの運動部において集合調査法により実施した。また調査データの分析に際してはAmos Ver.18を用いた。なお研究の構想段階において、性差及び競技の種類（団体種目・個人種目など）を視点とした分析も視野に含めていたもののサンプル数の偏りが少なからず認められることから、本研究では学年差に基づく分析に止めた。

3. 結 果

3. 1 仮説モデルの検討

本研究が想定した仮説モデルについて、構造方程式モデリングによる多重指標分析を行った。各変数の相関係数と平均値及び標準偏差は表2に示す通りである。分析の結果、仮説モデルの適合度指標はGFI=.946, CFI=.954, RMSEA=.104となり、GFI, CFI $\geq$.90, RMSEA<.10とする豊田¹⁹⁾の基準に照らせば、RMSEAはわずかではあるが基準を超えていた。また、精神的回復力は競技状況スキル及びライフスキルとそれぞれ比較的強い相関関係（競技状況スキル： $r=.69$, $p<.001$, ライフスキル： $r=.77$, $p<.001$ ）にあるにも関わらず、競技状況スキルから精神的回復力への因果係数

($-.03$, ns), ライフスキルから精神的回復力への因果係数(.80, ns)は共に有意ではなかった。本結果は、競技状況スキルとライフスキルの相関関係($r=.88$, $p<.001$)が強いことによって生じる多重共線性の影響を受けていると考えられた。

そこで競技状況スキルから精神的回復力へのパスを削除した改訂モデル(図2)について再度分析を行った。その結果、改訂モデルの適合度指標はGFI=.946, CFI=.957, RMSEA=.097となり適合度に改善が認められたほか、因果係数の値も有意になった。改訂モデルでは、競技状況スキルがライフスキルに対して、ライフスキルが精神的回復力に対して、それぞれ正の影響を及ぼすと考えられる結果が得られた。また潜在変数から観測変数への影響指標の最大値は.86, 最小値は.56であり、各潜在変数に対応する観測変数の説明力は高いと考えられた。

3. 2 学年による差異の検討

改訂モデルについて、1年生と2年生の差異を確認する目的で多母集団同時分析を行った(図3)。その結果、モデルの適合度指標はGFI=.895, CFI=.904, RMSEA=.103となり、GFI及びRMSEAにおいてわずかではあるが豊田¹⁹⁾の基準を越えていた。ただし、豊田は多母集団モデルでは観測変数の数が増えることによりGFIが低くなりやすいことから、GFI>.90の基準に拘り過ぎないように指摘している。また、RMSEAについても星野らが小標本(250以下)では値が高くなりすぎると指摘している²⁰⁾。以

図2 運動部活動経験と精神的回復力の関係

図3 学年別の分析結果

上のことから、本モデルのデータへの適合は容認できる範囲にあると考えられた。両学年における結果の比較から、1年生よりも2年生において運動部活動における経験が精神的回復力に

及ぼす影響が大きいと考えられる結果が得られた。潜在変数から観測変数への影響指標の最大値は.89、最小値は.49であり、ほとんどの変数において高い値を示していた。

4. 考 察

4. 1 運動部活動経験と精神的回復力の関係

まず本研究では、生徒の精神的回復力の高さが日常生活における様々なライフイベントを乗り越える上で必要とされるライフスキルの獲得程度と関係すると想定した。そしてライフスキルへと般化可能なスキルを運動部活動経験を通じて獲得することが、最終的に精神的回復力に影響を及ぼすとする仮説モデルを構築した。その仮説モデルについて分析した結果、仮説モデルは多重共線性の影響を受けていると考えられたことから、競技状況スキルから精神的回復力へのパスを削除したモデルへと改訂した。その結果、図2に明らかなように競技状況スキルからライフスキルへの因果係数、ライフスキルから精神的回復力への因果係数は共に高い値を示しており、運動部活動場面において獲得した心理的スキルはライフスキルとして般化することにより、間接的に精神的回復力の高さに影響を及ぼすのではないかと推察された。

競技状況スキルから精神的回復力への因果係数の値(-.03)がその相関係数(.69)と比較して著しく小さくなったのは、競技状況スキルから精神的回復力への影響よりもライフスキルから精神的回復力への影響の方が、相対的に大きかったことが原因であると考えられる。運動部活動という限定された状況における競技状況スキルよりも、日常生活場面でも利用可能な状態に般化したライフスキルを獲得している生徒の方が、精神的回復力も高くなるであろう。運動部活動は学校における教育活動として位置づけられ、生徒の教育の場として機能すると考えられているが²¹⁾、それは運動部活動という限定された状況での経験であったとしても、そこで学習した内容が日常生活場面においても繰り返されることが期待されているからである。従って運動部活動の指導においては、運動部活動場面で獲得した競技状況スキルを日常生活場面でも利用可能なライフスキルへと般化させるための取り組みが求められる。そうすることにより、

運動部活動経験を通じて精神的回復力を高めることができると考えられる。

一方で、多重共線性の影響が疑われたことから削除されたものの、実際には競技状況スキルから精神的回復力への直接的な影響も想定された。つまり、ライフスキルを変数として組み込まない場合には、競技状況スキルから精神的回復力への直接的な影響が観測されたと考えられる。確かに、競技状況スキルを獲得していたとしても、そのスキルを自動的にライフスキルとして日常生活場面で利用できるとは限らない。例えば運動部活動場面では仲間と意思疎通を図っているにもかかわらず、日常生活場面ではクラスメイトと意思疎通を図っていない生徒もいるであろう。しかし競技状況スキルを獲得している生徒の多くは、そのスキルをライフスキルとして般化できていることから、競技状況スキルから精神的回復力への影響も想定されるのではないかと考えられた。

影響指標に関して、競技状況スキル及びライフスキル共に対人スキルよりも個人的スキルの方が高い値を示していた。つまり競技状況スキル及びライフスキル共に、他者との関わりに関するスキルよりも目標達成に向けた取り組みに関するスキルの方が、わずかに強く反映されているようである。現代社会では他者とコミュニケーションを取るスキルは様々な場面で必要とされるものの、古くから指摘されているように目標は行動の動機づけに影響を及ぼす大きな要因の一つであることから²²⁾、競技状況スキル及びライフスキル共に目標達成に向けたスキルの方がわずかではあるが強く反映されるのではないかと考えられた。精神的回復力については感情調整がやや低い値になり、新奇性追求と肯定的な未来志向がわずかではあるが強く反映されていた。石毛・無藤¹²⁾によるレジリエンシー尺度においては「前向き性」として認められるように、精神的回復力には不確定な未来へと踏み出そうとする心理的特性がより反映されるのではないかと考えられた。そして精神的回復力にこうした傾向が認められることから、運動部活

動場面における経験として、対人スキルよりも未来の目標達成に向けた個人的スキルを獲得することの方が、肯定的な未来志向や新奇性追求などが相対的に強く反映される精神的回復力に対して影響を及ぼすのではないかと推察された。

4. 2 学年による差異

本研究で扱う心理的スキルは学習によって獲得可能であるという前提に立っている¹⁷⁾¹⁸⁾。従ってその獲得には学習時間や学習環境が大きく関係すると想定している。生徒の競技状況スキル及びライフスキルについても、運動部活動への参加を通じた学習時間の差や各学年で学習されるスキルの違いが学年差として表れると共に、精神的回復力との関係にも反映される可能性が窺われた。そこで学年差に注目し、生徒を1年生と2年生に区分した上で改訂モデルに基づき分析を行った。

その結果、因果係数の値から、2年生では競技状況スキルからライフスキルへの値が.94であり、般化が効率的に行われている様子が窺われるのに対して、1年生では.75に止まっていた。本結果については、運動部への参加年数の長さによる学習時間の差異が表れたのではないかと推察された。2年生の結果からは、運動部活動に継続的に参加することにより、運動部活動場面で実施している目標設定や情報交換などを日常生活場面においても用いることができるようになる可能性が窺われた。上野・中込¹⁴⁾は競技状況スキルからライフスキルへの般化に関して、対人スキルは「スキルの価値」に関する指導（他者と意思疎通を図る能力が社会において高く評価されることを伝える）、個人的スキルは「スキルの実践」に関する指導（日常生活場面においても目標を設定するよう勧める）を受けることにより般化が促進される、と考えられる結果を示している。2年生に関しては、運動部活動に継続的に参加するなかで指導者から受ける働きかけが、ライフスキルへの般化に関係したのではないかと考えられた。一方、1

年生では運動部活動への参加を通じて競技状況スキルを獲得したとしても、そのスキルを運動部活動以外の場面に般化させることは2年生よりも難しいようである。ただし1年生であっても.75の値を得ていることからすれば、2年生ほどではないものの競技状況スキルからライフスキルへの般化が促進されていると推測される。ライフスキルへの般化には相応の時間が必要であるとも考えられるが、スキルの価値により重点をおいて説明する、実践の方法をより具体的に説明するなどの指導を行うことにより、1年生においてもライフスキルへの般化を促進できるのではないかと考えられた。

次に、ライフスキルから精神的回復力への因果係数に関して、2年生では.82となりライフスキルを獲得しているほど精神的回復力も高いと考えられるのに対して、1年生では.54に止まり相対的にライフスキルから精神的回復力への影響は小さいと考えられた。そして先の競技状況スキルからライフスキルへの因果係数の値における差異と併せれば、運動部活動場面における経験が精神的回復力に及ぼす影響は1年生よりも2年生において大きいと考えられた。

本結果に関しては、潜在変数から観測変数への影響指標の差異が関係するのではないかと推察された。潜在変数である競技状況スキル及びライフスキルは共に、1年生では個人的スキルよりも対人スキルを比較的強く反映している一方で、2年生では対人スキルよりも個人的スキルを強く反映している。つまり1年生では対人スキルと精神的回復力との関係が問われる傾向にあるのに対して、2年生では個人的スキルと精神的回復力との関係が問われる傾向にあると言える。そして先述した通り、精神的回復力については感情調整よりも、新奇性追求と肯定的な未来志向が相対的に強く反映されている。これらの結果から、精神的回復力が「色々なことにチャレンジするのが好きだ（新奇性追求）」、「自分の未来にはきっといいことがあると思う（肯定的な未来志向）」など、将来の目標達成に向けて取り組む個人的スキルとの関係が推測さ

れる観測変数を反映していることから、1年生よりも2年生において運動部活動場面における経験と精神的回復力の間に関係が認められたのではないかと推察された。

1年生と2年生において潜在変数に反映される観測変数の影響指標に差異が認められた背景として、それぞれが置かれている環境が挙げられる。高校への進学にあたり生徒は様々な中学から集まってくることから、1年生は同級生に加えて、教員や上級生との間でも新しく人間関係を築く必要がある。そこでは当然対人スキルが必要とされる。1年生において個人的スキルよりも対人スキルが潜在変数をより説明していたのは、1年生は対人スキルが必要とされる環境にあり、多くの生徒が個人的スキルよりも対人スキルを身につけたからではないかと考えられた。一方で2年生は運動部では目標に向かってチームを引っ張ることが期待されるほか、日常生活場面においても将来の目標を見据える機会が増えてくる。そこでは個人的スキルが必要とされる。2年生において対人スキルよりも個人的スキルが潜在変数をより説明していたのは、2年生は個人的スキルが必要とされる環境にあり、多くの生徒が対人スキルよりも個人的スキルを身につけたからではないかと推察された。

5. 今後の課題

本研究では、運動部員の精神的回復力の高さには運動部活動場面における競技状況スキルの獲得程度と、そのスキルを日常生活場面へと般化したライフスキルの獲得程度が関係するとした仮説モデルに基づき、運動部活動経験と精神的回復力の関係について実証的に検討した。その結果、運動部員の競技状況スキルはライフスキルとして日常生活場面に般化されることにより精神的回復力を高めると考えられる結果が得られた。本結果はライフスキルの獲得に結びつくような運動部活動が展開されるならば、運動部活動への参加を通じて生徒の精神的回復力を高めることができる可能性を示唆している。

一方で、今後の課題として以下の事柄が挙げられる。まず本研究は一時点の調査に基づいた結果であることから、運動部活動経験と精神的回復力の因果関係を推測するに止まった。今後は縦断調査を行うなど、両者の因果関係の解明に迫る研究が求められる。また本研究で検討した仮説モデルの適合度からすれば、他の要因を加えモデルを改良することによりさらに適合度を高めることができると考えられる。競技状況スキル及びライフスキルの獲得と精神的回復力の高さとの間をつなぐ要因について、さらに検討が必要である。

(注1) 本研究では、上野²³⁾において用いられたデータの一部を再利用している。

参考文献

- 1) 大橋美勝：スポーツ部活、今何が問題か、体育科教育, Vol.43, No.5, pp.14-16, 1995.
- 2) 植田真紀：運動部活動のディスコース研究－体罰問題の視点から－, 中国四国教育学会教育学研究紀要, Vol.45, No.1, pp.289-292, 1999.
- 3) 佐伯聰夫：生涯スポーツ時代の運動部活動, 体育科教育, Vol.38, No.9, pp.14-17, 1990.
- 4) 文部省体育局体育課：「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」の概要について, 中等教育資料, Vol.708, pp.102-106, 1998.
- 5) 上野耕平：体育・スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得に関する研究の現状と今後の課題, スポーツ心理学研究, Vol.38, No.2, pp.109-122, 2011.
- 6) 島本好平, 石井源信：運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定, スポーツ心理学研究, Vol.37, No.2, pp.89-99, 2010.
- 7) WHO編 川畑徹朗他監訳：WHO・ライフスキル教育プログラム, 大修館書店, pp.9-30, 1997.
- 8) Danish, S.J., et al. : Psychological Interventions: A Life Development Model. In: Murphy, S.M.(Ed.) Sport Psychology Interventions, Human Kinetics, pp.19-38, 1995.
- 9) 上野耕平：運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係, 体育学研

- 究, Vol.51, No.1, pp.49-60, 2006.
- 10) 白井利明：時間的展望の生涯発達心理学, 勁草書房, pp.1-14, 1997.
 - 11) Masten, A.S., et al. : Resilience and Development : Contributions from The Study of Children who Overcome Adversity, Development and Psychopathology, Vol.2, pp.425-444, 1990.
 - 12) 石毛みどり, 無藤隆：中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連－受験期の学業場面に着目して－, カウンセリング研究, Vol.53, pp.356-367, 2005.
 - 13) 小塩真司, 他：ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成, カウンセリング研究, Vol.35, No.1, pp.57-65, 2002.
 - 14) 上野耕平, 中込四郎：運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究, 体育学研究, Vol.43, No.1, pp.33-42, 1998.
 - 15) 徳永幹雄：スポーツ選手に対する心理的競技能力の評価尺度の開発とシステム化, 健康科学, Vol.23, pp.91-102, 2001.
 - 16) 島本好平, 石井源信：大学生における日常生活スキル尺度の開発, 教育心理学研究, Vol.54, No.2, pp.211-221, 2006.
 - 17) Goldstein, A.P. : Psychological Skill Training, Pergamon Press, pp.1-11, 1981.
 - 18) 杉山佳生：スポーツによるライフスキルとソーシャルスキル, 体育の科学, Vol.55, No.2, pp.92-96, 2005.
 - 19) 豊田秀樹：共分散構造分析入門編－構造方程式モデリング－, 朝倉書店, pp.170-188, 1998.
 - 20) 星野崇宏, 他：構造方程式モデリングにおける適合度指標とモデル改善について－展望とシミュレーション研究による新たな知見, 行動計量学, Vol.32, No.2, pp.209-235, 2005.
 - 21) 文部省：みんなでつくる運動部活動－あなたの部に生かしてみませんか－, 東洋館出版社, pp.1-4, 1999.
 - 22) 上淵寿：第8章目標理論, 宮本美沙子, 他：達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学, 金子書房, pp.187-199, 1995.
 - 23) 上野耕平：運動部活動及び学校生活場面における心理的スキルと生徒の競技能力及び精神的回復力との関係, スポーツ教育学研究, (印刷中).